



室町期伊勢物語絵巻の一様相：
静嘉堂文庫所蔵「伊勢物語絵巻」が語るもの

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2010-06-23 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 青木, 賜鶴子 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24729/00002605

室町期伊勢物語絵巻の一樣相

― 静嘉堂文庫所蔵「伊勢物語絵巻」が語るもの ―

青木 賜鶴子

一 はじめに

平安時代の物語は、早い段階から絵とともに享受されていたらしい。源氏物語中、絵合巻と総角巻の二箇所而言及される伊勢物語はいずれも絵巻または紙絵の形であり、平安時代中期には絵を伴う形での享受が広く行われていたことをうかがわせる。

現存する伊勢物語絵のうち、鎌倉時代制作の「梵字経刷白描伊勢物語絵巻断簡」(以下「白描本」と略称する)、和泉市久保惣記念美術館所蔵の重要文化財「伊勢物語絵巻」は、いずれも一部が現存するのみであり、完本の絵巻としては、室町時代後期の制作にかかる大英図書館所蔵「伊勢物語図会」三帖(以下「大英図書館本」と略称する)、小野家所蔵「伊勢物語絵巻」三巻(以下「小野家本」と略称する)が知られる。また江戸時代の模本ではあるが原本は鎌倉時代に遡ると考えられる絵巻として東京国立

博物館所蔵の「異本伊勢物語絵巻」があり、いわゆる普通本とは異なる伊勢物語伝本によって絵が描かれたと考えられている。^(注1)

大英図書館本と小野家本は、絵画化の場面選択とその図様がすべて共通しており、直接の書承関係はうかがえないもの、おおもとの祖本は共通すると考えられる。小野家本は、嵯峨本伊勢物語の挿絵の源流を探る上で重要な絵巻の一つとしても注目されてきたのだが、画面構成のうえではむしろ大英図書館本のほうが祖本の姿を留めている可能性が高いことは既に指摘したところである。^(注2) 両本ともに本文は藤原定家書写本の系統であるが、絵のほうは、非定家本系(藤原定家書写系統本とは別系統の本)の伊勢物語本文をもとに絵画化された可能性がある。この点については従来から指摘があったが、両本に共通するおおもとの粗本から写し継がれて現存本に至った事情については、さらに詳しく検討して見る必要があると思われる。

今回考察の中心とする静嘉堂文庫所蔵の「伊勢物語絵巻」(函架番号一〇五―五七/二九二〇六、以下「静嘉堂文庫本」と略称する)は、室町時代中後期頃の書写とおぼしい一軸の絵巻で、詞は第七十一段末尾から第九十段まで、絵は五図のみの零本であるが、絵五図の場面とその図様はすべて大英図書館本、小野家本と共通し、やはり同じ流れに立つと判断される絵巻である。

静嘉堂文庫本は、『マイクロフィルム版 静嘉堂文庫新収古典籍』(二〇〇〇年、雄松堂書店)に「伊勢物語(絵入本)」として収載され、モノクロフィルムによってその全容が紹介された。稿者も先般、羽衣国際大学日本文化研究所編『伊勢物語絵巻絵本大成』(二〇〇七年、角川学芸出版。静嘉堂文庫本の解題は澤田和人氏との共同執筆)において解題執筆の機会を得たが、その詞書本文は、まさに非定家本系であり、三本のおおもととの祖本の絵巻——室町時代に存在したであろう伊勢物語絵巻について、大きな示唆を与えるものと考え。本稿は、静嘉堂文庫本の本文をさらに詳しく検討するとともに、その祖本の絵巻がどのようなものであったのか、いささかの推測を加えようとするものである。

一 静嘉堂文庫本の概略

静嘉堂文庫本の法量、書誌等についての詳細は別稿(注)に譲り、

概略のみ記しておく。大きさは縦二八・〇センチ、総長八四〇・八センチ(本紙のみ)、一紙の幅は、おおむね二七〜三九センチ前後で、詞は前述のように第七十一段末尾から第九十段まで、絵は、第七十六段「小塩の山(大原野神社参詣)」、第七十七段「安祥寺のみわざ(安祥寺における多賀幾子法要)」、第八十二段「渚の院の桜(渚の院における桜狩)」、同「天の川(天の川における宴)」、第八十三段「小野の庵(小野の庵に住む惟喬親王訪問)」の五図をもつ。第八十二段「天の川」の絵が誤って第七十四段と七十五段の詞の間に貼り継がれているほかは、おおむね当該部分の詞の後に絵が置かれている。

絵は、特に人物の顔など、部分的に後世の補筆があると見られるのだが、祖本からは離れると思われる描写が見られる一方で、祖本の姿を色濃く伝えると考えられる部分もある。また大英図書館本、小野家本は、第七十一段〜第九十段の詞の間に七図の絵を備えているが、紙継部分の卷子皺の状況から、静嘉堂文庫本も本来はこの部分に七図の絵を備えていたと考えられる。詞は、後述するように、誤写をのぞけば非定家本の本文を伝えているが、末尾の二紙(第八十七段「はるゝ夜の…」の歌〜第九十段の詞)は別筆で紙質も異なるようであり、この部分のみ定家本系の本文である。

三 静嘉堂文庫本の詞書本文

静嘉堂文庫本の詞書本文が非定家本系の本文を残すことは、冒頭部からも察せられる。^(注4)

女、たび人をいかゞ思けむ、

神風やいせのはま荻おりはへて

たびねやすらんあらかきはまべに (第七十一段)

昔、おとこ、伊勢のくになりける女をゑあはで、

となりのくにえゆくとして、いみじう恨ければ、

おほよどのまつはつらくもあらなくに

うらみてのちもかへる波かな (第七十二段)

傍線部は、藤原定家書写系統本などの一般的な伝本には見られず、国立歴史民俗博物館蔵大島氏旧蔵本（以下「歴博本」と略称する）の末尾に付載されている小式部内侍本第七十一段末尾に見られるものである。

ただし、小式部内侍本の本文に近いわけではない。小式部内侍本は抄出の形でしか残っていないため、重複するのは第七十三・七十四段のみなのであるが、参考までに定家天福二年本とも対照し、異同のある部分をあげると、次のようになる（抄出本文の後の括弧内に、静嘉堂文庫本を「静」、小式部内侍本を「小」、天

福本を「天」の略称で示す。見せ消ち・補入などは訂正後の本文に従う。以下同様）。

- ① そこにありけりとはきけとも(静)―そこにありとはきけと(小)―そこにはありときけと(天)
 - ② せうそくをたにも(静)―せうそくをたに(小)―せうそくをたに(天)
 - ③ おもひけり(静)―ありきて思ひける(小)―おもひける(天)
 - ④ 月の中の(静)―月のうちの(小)―月のうちの(天)
 - ⑤ かつらのことの(静)―かつらのことの(小)―かつらのこと(天)
 - ⑥ いたく女を(静)―女を(小)―女をいたう(天)
 - ⑦ かさなるやまはへたてねと(静)―かさなる山はとをけれと(小)―かさなる山にあらねとも(天)
 - ⑧ ナシ(静)―あまのすむさとのしるべにあらねともうらみむとのみ人はいふらん(小)―ナシ(天) (以上第七十四段)
- このように、小式部内侍本と一致するのは⑤のみである。①③⑥は静嘉堂文庫本の独自異文であるが、②は無奥書定家本とされる伝慈鎮為家両筆本（「も」見せ消ち）、④⑤は真名本の「月廼中之楓廼如之」、⑦は天福本以外の多くの定家本と一致し、⑧は小式部内侍本の独自異文である。

室町期伊勢物語絵巻の一樣相―静嘉堂文庫所蔵「伊勢物語絵巻」が語るもの―

章段	静嘉堂文庫本	上と一致するおもな伝本	藤原定家書写天福二年本
72	(伊勢のくになりける)女を	民部	女
72	多あはて	片名、最福(えあわて)	又えあはて
72	ゆくどて	栄雅、民部	いくどて
75	さして	尊心、奈京、片名	まして
76	宮すとろ	歴博	春宮のみやすん所
76	御車から	歴博	御くるまより
77	たむらのみかと、申	異本絵巻	たむらのみかと、申すみかと
77	そのみかとの女御	異本絵巻	その時の女御
77	せんさくはかりそありける	異本絵巻	ちさくけ許あり
77	木につけて	歴博	木のえたにつけて
77	あつめたりければ	異本絵巻	たてたれば
77	野よめといふければ	異本絵巻	春の心はえあるつたとまつらせたまふ
77	むまの頭	最福	右のむまのみ
77	春のわかれをしとなるへし	異本絵巻	はるのわかれをしとなるへし
78	うせ給てのち	七海、栄雅、歴博	うせ給て
78	そのみわさに	歴博	そのみわさにまつてたまひてかへさに
78	かの大将	真名、民部(この大将)	さるにかの大将
78	たにやはあるへき	民部	たにやはあるへき
78	きのくに	飛鳥、良経、時頼、歴博	きのくにの
79	ナシ	肖柏、真名	これはさたかすのみこ時の人中将の子となんいひける あにの中納言ゆきはらむすめのはらなり
80	たてまつるとて	民部、歴博(たてまつる)	たてまつらすとてよめる
81	おもしろきいあつくりてすみ給ひけり	異本絵巻	家をいとおもしろくつくりてすみたまひけり
81	つこもりはかりに	異本絵巻	つこもりかた
81	ひとひよひと夜	真名(一日一夜)	夜ひとよ
81	あけてゆくさかりに	異本絵巻	よあけてゆくほかに
81	いたしきのしたを	歴博、民部	たい(いた)しきのしたに ※いたしきのしたに(多本)
82	これたかのみこと申	神宮、異本絵巻	これたかのみこと申すみこ
82	おはしけり	最福、民部	おはしましけり
82	さけをのみつて	異本絵巻	さけをのみみつ
82	とよめりければまたある人	歴博、神宮	となむよみたりける又人のうた
82	きよき所を	歴博、神宮、民部(きよき所)、真名(潔所)	よき所を
82	もとめてゆくに	承久	もとめてゆくに
82	みこのうたを	七海、為相、栄雅、肖柏、歴博、神宮、歴博	みこのうたを
83	ナシ	異本絵巻	とてなむなくくきにける

(伝本略称)

尊心：三条西家藏伝准后筆本、飛鳥：宮内庁図書藏伝飛鳥并雅世筆本、七海：七海兵吉氏藏本、奈京：七海兵吉氏藏奈良京物語、片名：池田龜鑑博士藏片假名書入本、為相：七海兵吉氏藏伝為相筆本、為慈：須田竹次郎氏旧藏伝慈為家兩筆本、良経：守屋孝藏氏藏伝良経筆本、承久：七海兵吉氏藏承久本、栄雅：池田龜鑑博士藏伝飛鳥并雅書入本、肖柏：宮内庁書陵部藏伝肖柏筆本、最福：最福寺藏本、時頼：最福寺藏時頼本、歴博：国立歴史民俗博物館藏大島氏旧藏本、『国立歴史民俗博物館藏貴重典籍叢書』、小式部：小式部内侍本(歴博本付懸)、神宮：神宮文庫本、民部：本間美術館藏伝民部卿局筆本(複製日本古典文学館)、真名：真名本(高橋忠彦・高橋久子編『真名本伊勢物語本文と索引』)、異本絵巻：異本伊勢物語絵巻(『伊勢物語絵巻絵本大成』)、静嘉堂文庫本との重出は77・81・82段前半・83段後半のみ、特に注記しない場合本文は『伊勢物語に就きての研究』による。

静嘉堂文庫本の本文は、実ほどの伝本とも一致しない場合のほ
うが圧倒的に多い。その多くは静嘉堂文庫本の誤写かと思われる
場合であり、定家天福本を括弧内に入れて示せば、第七十五段「あ
てきて（あていきて）」、「しほみしほひに（しほひしほみち）」、第
七十八段「さうしのまゑにみそつるに（みさうしのまへのみそに）」、
第八十一段「おはしまして（おはしまして）」、「しほりま（しほ
かま）」、第八十二段「ときこゑ（時世へて）」、「そのわすれに（そ
の人の名わすれに）」、「いれすもあらなん（いれすもあらなん）」、
第八十四段「千とせもと（千よもと）」、第八十五段「ひめもす（ひ
ねもす）」のごとくである。

また、独自異文のうち、第八十二段「天河をたひにて」は定家
天福本に「かた野をかりてあまの河のほとりにいたるを題にて」
とある部分であり、同様に、第八十三段「れいのごとくありきて
宮にかゝりたまふを」は天福本「れいのかりしにおはしますとも
にうまのかみなるおきなつかうまつれり日ころへて宮にかへりた
まうけり」、第八十五段「この心のうちよめといふにある人のよめ
る」は天福本「みな人ゑひて雪にふりこめられたりといふをたい
にてうたありけり」とある。このような例を見ると、絵巻にする
際に本文の一部を省略した可能性も考えられる。

前頁の表は、静嘉堂文庫本の本文が定家天福本とは対立して他

の伝本と一致するおもな例をまとめたものである（前掲の例は除く）。

これを見ると、定家本のうち武田本やいわゆる流布本及び無奥
書定家本とされる本の一部と一致する場合もあるが、歴博本、

同系統の神宮文庫本、本間美術館蔵伝民部卿局筆本（以下「伝民
部卿局筆本」と略称する）、真名本などの非定家本系の伝本や、異

本伊勢物語絵巻の本文とのみ一致する場合が多いことに気づく。
定家天福本との比較的大きな異同としては、章段末尾の一部を

持たない場合があげられる。第七十七段末尾の「とよみたりける
をいまみればよくもあらさりけりそのかみはこれやまさりけむあ

はれかりけり（天）」は独自異文であるが、表にあげた第七十九段末
尾の「これはさたかすのみこ…」以下は無奥書定家本とされる宮

内庁書陵部蔵伝肖柏筆本のほか、真名本とも一致する。

表では静嘉堂文庫本と一致する例をあげたため一〜二字の相違
が多くなつたが、全体的に見て、やはり定家本には遠く非定家本

系の本文に近い場合が多い。さきほどと同様に本文を対照してみ
る（章段番号、静嘉堂文庫本の本文、ほぼ一致する伝本の本文と略称、

定家天福本の順に示す。天福本以外の略称は前頁の表と同じ）。

75 わりなく―あはむとわりなく（神宮）、あはんとわりなく将相与無破（真名）

―あらむと（天）

75 かたき事にてなん―かたきことになん（歴博）、かたき事

になむ(民部)、難事^{かたきこと}何(真名)―かたき女になん(天)

76 つかふまつれりける兵衛のつかさに候ける―つかうまつりける兵衛の司にさふらひける(神宮)、つかふまつれりける近衛つかさなりける(民部)、つかうまつりける近衛司にさふらひける(歴博)―このゑつかさにさふらひける(天)

77 御はてあんしやうしにてやよひのつこもりにしけるに―御はてを弥生晦日安祥寺といふ所にてしけり(異本絵巻)―御行安祥寺^{みわさあんしやうし}而^に沾洗^{つこもり}之^に晦^し尔^に為^し計利^に(真名)―安祥寺にてみわさしけり(天)

78 とよめりける昔の心さしはかやうになんありける―となんよみけるむかしの人のこゝろさしかやうになんありける(歴博)、となむよめりけるむかしの人の心さしはかやうになむありける(神宮)―となむよめりける(天)

79 昔宇治の女御のみこをうみ給ける―昔うちの宮にみこうまれたまゑりけり(民部)―むかしうちのなかにみこうまれ給へりけり(天)

81 おもしろきをほむるよしの歌上中下よむ―面白^{おもしろきをほむるうた}平^{よむ} 誉歌^{ほむるうた}上中下読(真名)、をもしろきをほむるに歌やみなからしもよむ(歴博)―おもしろきをほむるうたよむ(天)

82 むまのかみなりける人―むまのかみなりける人のよめ

る(民部)―むまのかみのよめる(天)

82 かしこになんおはしかよひけり―かしこへなんかよひをはしましける(歴博)、かしこへなむかよひおはしましける(神宮)、かしこゑなむかよひたまひける(民部)―その宮へなむおはしましける(天)

84 ははみこなりけり―ははみこなりけり(歴博※神宮も同)―ははなん宮なりける(天)

84 かのおとこいたううちなきて馬にうちのりてみちすからおもふ―となむありけるこれをみてむまにもりあるすまいるとてみちすからおもひける(民部)、諾^{とありけり}在^{をみてむま}計利^に其^に乎^に見^{をみてむま}而^に馬^に爾^に毛^に乘^に不^に合^に 甚^{いといたううちなきてみちすからおもひける}痛^に打^に涙^に而^に道^に尚^に思^に計^に流^に(真名)―かのおいたううちなきてよめる(天)

86 なをこの事とけなんといひけり―この事とけんといへりければ(歴博※神宮、民部も同様)、尚^{なをこのことけんといひければ}此^に事^に終^に与^に云^に計^に礼^に者^に(真名)―猶心さしはたさむとや思けむ(天)

というように、定家本の本文とは対立して、歴博本、同系統の神宮文庫本、伝民部卿局筆本、真名本、異本伊勢物語絵巻などの本文に近い場合が多い。特に近い現存伝本は見出せないが、絵巻の元になった伊勢物語伝本が非定家本系であったことはまづ疑いないだろう。

ここで、別筆とおぼしい末尾の二紙、第八十七段「はるゝ夜の…」の歌以降の本文系統についても確認しておく。

別筆部分にも、誤写とおぼしい独自異文が見られる。第八十七段「わかむかた（わかすむかた）」、「はまいとたかし（浪いとたかし）」、「いはゝ（いてゝ）」、第九十段「なさけとや（あはれとや）」、「さくら（さくらにつけて）」などである。

しかし誤写をのぞけば、ほぼ定家天福本と一致し、天福本とは相違しても、他の定家本の中に一致する本文が見出せる場合が多い。たとえば、第九十段「にほふらめ」は天福本の「にほふとも」とは対立するが、定家武田本、流布本、無年号定家本の多くの伝本と一致する（この場合神宮文庫本、真名本とも一致）。

以上のように、末尾二紙にも誤写とおぼしい独自異文があるが、絵巻本体の本文は非定家本系であるのに対して、別筆とおぼしい末尾二紙は、定家本系統の本文なのである。

四 大英図書館本・小野家本の問題

大英図書館本と小野家本は、ともに室町時代末から桃山時代の制作にかかると考えられ、絵画化の場面選択とその図様はすべて一致している（大英図書館本は第二十三段「高安の女」の絵を欠

くが、本来は存したと考えられる）。どちらも現在は定家本系統の本文を有しているが、おおもとの祖本の絵は、非定家系統の本文をもとに描かれていた可能性があると考えられる。

ひとつは、両本ともに第三十段の本文の後に置かれている絵で、水辺に向かい合って座る男女を描き、男が水を掬っている。大英図書館本によって、本文と絵の位置を示すと、次のようになる。絵の位置は小野家本も同じである（「図1」「図2」参照）。

（第28段） むかし色ごのみ成ける女いでゝいにければ

などでかくあふごかたみに成にけん水もらさ
じとむすびしものを

（第29段） むかし春宮の女御の御かたの花の賀にめしあづけ
られたりけるに

花にあかぬなげきはいつもせしかどもけふの
こよひに似る時はなし

（第30段） 昔おとこはつかかりける女のもとに

あふ事は玉のをばかりおもほえてつらき心の
ながく見ゆらん

絵

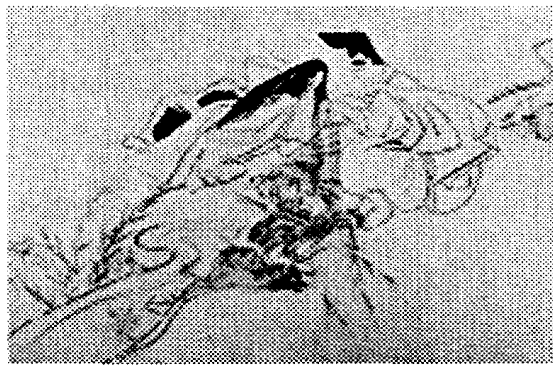
（第31段） むかしおとこ宮のうちにてあるごたちのつぼねの
まへをわたりけるになにのあたにか思ひけんよ



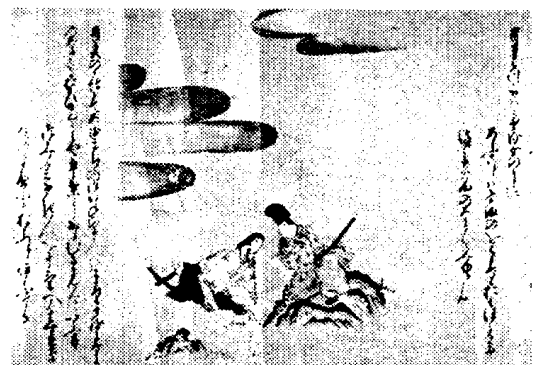
(31 段詞)

(30 段詞)

〔図 1〕 大英図書館本



〔図 3〕 白描本 (描き起こし)



(31 段詞)

(30 段詞)

〔図 2〕 小野家本

しや草葉よならんさがみむといふ おとこ(以下略)

大英図書館本・小野家本では、第二十八段から第三十段までの詞の後にこの絵が置かれているので、配列上は、第二十八段の男の歌「水もらさじとむすびしものを」の絵としてここに置かれていることになる。しかし、大英図書館本・小野家本ともに、若干の例外を除き、原則として対応する詞のすぐ次に絵が置かれている。^(注6)第二十八段の絵であれば、第二十八段の詞の次に置かれるはずであるのに、第三十段の詞の次に置かれている点に疑問が残る。

この絵は、白描本にも存し(〔図3〕参照)、異本系独自章段「せかゐの水」の段の絵かと指摘されてきた。^(注7)また時代は下るが大英図書館本・小野家本と同様の図様を持つ鉄心斎文庫所蔵「伊勢物語絵巻乙本」にも見える。^(注8)ただし白描本の詞書部分は失われており、鉄心斎文庫本は絵のみの零本であるため、二本とも配列は不明である。

さて、「せかゐの水」の段は、伝民部卿局筆本第七段(定家本第六段の次)と、真名本第三十段(定家本第二十九段の次)に置かれている。以下に本文を引用する。^(注9)

昔をとこありけり。女をぬすみていてゆくみちにて、みずのまむとどふに、うなづきければ、つきなどもぐせねば、

手にむすびてのます。さて、ゐてのぼりにけり。おむな、はかなくなりければ、もとの所へゆくみちに、かのし水のみし所にて、

おほはらやせかひの水をむすびあげてあくやといひ

し人はいづらぞ (伝民部卿局筆本・第七段)

昔男女平盗而往道尔 水有所尔而 夫将吞哉与問尔

領押計札波 結而為吞 然将而往尔 率尔墓将成 壮士

本所江還尔 彼水飲志所尔而

大原哉堰之志水尾 結上而 飽哉与問志人者等

(真名本・第三十段)

この段は、歴博本引用の皇太后宮越後本・小式部内侍本、宮内庁書陵部蔵阿波国文庫旧蔵本、谷森本、神宮文庫本、泉州本などにも存するが、配列は不明である(本文にも小異があり、男が亡くなるとする伝本もある)。

したがって、配列がわかるのは、掲出した伝民部卿局筆本と真名本、絵巻では大英図書館本・小野家本の二本ということになる。

大英図書館本・小野家本では、配列上は第二十八段の絵と見なければならぬが、白描本の男が女に水を飲ませる図様は、まさに「せかゐの水」の段の「手にむすびて飲ます」であり、

第二十八段の「水もらさじとむすびし」とは合致しにくい。また白描本の服装の分析から、「男の風折烏帽子に狩衣姿という服装、女の桂姿という服装は、連れ立って逃げる旅姿として理に適ったものである」(『伊勢物語絵巻絵本大成』研究篇二八頁。澤田和人氏執筆)との指摘があり、白描本は「せかゐの水」の段の絵と考えるのが妥当であろうから、大英図書館本・小野家本も、本来は「せかゐの水」の段の絵として描かれていた可能性が高い。それでは、なぜ「せかゐの水」の段の絵が第三十段の詞の次に置かれているのだろうか。「便宜的に定家本の二八段に当嵌められた」(注11)にすぎないのだろうか。

ここで、真名本の三十段目に「せかゐの水」の段があることに注目したい。真名本の本文は歴博本などの広本系諸本、伝民部卿局筆本に近い場合が多く、仮名書きの伝本をもとに漢字に置き換えたものかと推測されているが、そのような、真名本の配列に近い(仮名書きの)伝本をもとに絵画化されたとすれば、その絵は、三十段目「せかゐの水」の詞の次に置かれることになる。静嘉堂文庫本が真名本を含む非定家本系に近い本文を持つことを考え合わせると、もともとは、真名本に近い配列の非定家本系の伝本をもとに描かれた「せかゐの水」の段の絵であった可能性が高いと言えるのではないだろうか。



〔図4〕大英図書館本

もう一つは、第六十三段の絵である。つくも髪のお女とのお話で、男の家に来て垣間見していた女は、男が女の家に行こうとしているのを見て、

大慌てで家に帰る。大英図書館本・小野家本は、この垣間見の場面を絵にしているが、出発しようとする男の様子は、定家本の「出でたつけしき」

よりも、広本系諸本や伝民部卿局筆本の「馬に鞍置かせて

出で立つつけしき」、真名本の「むまにくらをきていでたつけしき馬尔鞍置而出立気色」に近く、

従者に命じて馬に鞍を置かせているところが描かれている（〔図4〕参照）。

大英図書館本・小野家本の詞は、現在は定家本系の本文をもつが、おおもとの祖本の絵巻は、以上見てきたように、非定家本系の本文をもち、その本文をもとに絵が描かれていたのではないだろうか。そして、ある時期、何らかの事情によって、本文のみ定家本系に差し替えられたのではないか。時代が下るに

つれて定家本系の伝本が流布してゆき、他系統の伝文を凌駕してゆく状況を思えば、非定家本系から定家本系への差し替えは、十分に起こり得るのではないだろうか。

五 おわりに

静嘉堂文庫本の詞書本文は非定家本系であるが、別筆とおぼしい末尾の二紙、第八十七段「はるゝ夜の…」の歌以降は定家本系の本文を持つことは前述した。これは何を意味するのだろうか。あくまで推測ではあるが、静嘉堂文庫本の末尾二紙を書いた人物すなわち最終筆者は、絵巻の詞書が第八十七段の途中で終わっていたゆえに、その続きを補おうと試みた。その際、価値の高い定家本が入手できたため、それによったのではなからうか。そして、大英図書館本・小野家本の場合、同様のことが詞書全体にわたって起きたのではないか。前述したように、静嘉堂文庫本の本文は、誤写によると見られる独自異文が多く、そのままでは意味が通じにくい箇所も少なくない。大英図書館本・小野家本の場合も、絵巻の詞書が意味の通じにくい本文であった、あるいは定家本が入手できた、等の理由で、定家本系の本文に差し替えられたのではないかと思うのである。

小野家本と大英図書館本の詞書本文の現状は、ともに定家本

系ではあるものの、同系統と言えるほどには一致しない。^(注1) おおもとの祖本の絵巻から、静嘉堂文庫本と、大英図書館本及び小野家本、という二つのグループに分かれて伝わり、写し継がれてゆくうちに本文が違ってしまったのか、それとも、三本それぞれに伝わり、上記推測通りであるとすれば大英図書館本と小野家本にだけ偶然定家本への差し替えが行なわれたのか、まったくわからない。しかしながら、静嘉堂文庫本を追究することによって、大英図書館本、小野家本など一群の絵巻の祖本の姿と伝流の様相が、おぼろげながらも見えてくるように思われる。

注

- (1) 五本ともに『伊勢物語絵巻絵本大成』(羽衣国際大学日本文化研究所編、二〇〇七年、角川学芸出版) 所収。本稿で使用した図版はすべて同書による。
- (2) 注1の『伊勢物語絵巻絵本大成』研究篇六六頁、七一〜七二頁。
- (3) 注1の『伊勢物語絵巻絵本大成』に絵五図の図版、解題、詞全文の翻刻を収録した。また書誌等の詳細については、「静嘉堂文庫所蔵『伊勢物語絵巻』—紹介とその位置づけ—」(『伊勢物語 創造と変容』二〇〇八年、和泉書院) に発表予定。
- (4) 改行は原本通り。引用の際、濁点、句読点を適宜加えた。
- (5) 定家天福本の引用は『御所本 伊勢物語 宮内庁書陵部蔵 冷泉為和筆』(一九八一年、笠間書院) 所収の影印、歴博本付戴小式部内侍本の引用は『国立歴史民俗博物館蔵貴重典籍叢書』(一九九九年、臨川書店) 所収の影印による。
- (6) ひとつは第一段の絵で、第一・二段の詞の次に、もうひとつは第二十九段「花の賀」と思われる絵で、第十七段詞書の途中に置かれている。第一段の絵は、春日の里の「女はらから」を垣間見した主人公が歌を贈る第一場面と、帰ろうとする男と従者を追いかけるようにして、女からの返歌を女房が届ける第二場面の二つの場面を一図に描く。なぜ第二段の後に置かれているのか不明だが、後の嵯峨本で、第二場面があたかも第二段の挿絵のように第二段本文の後に置かれているのは、この影響かもしれない。第二十九段「花の賀」の絵が現在の位置に動いた理由も不明であるが、もともと非定家本をもとに絵が描かれていたとすれば、定家本の本文に差し替えられたことと何らかの関係があるかもしれない。
- (7) 伊藤敏子氏『伊勢物語絵』(一九八四年、角川書店)、千野香織氏「絵巻Ⅱ伊勢物語絵」(『日本の美術』三〇一号、一九九一年、至文堂)、C・フランクリン・セイヤー氏「初期『伊勢物語絵』の淵源とその展開」(『在外 日本 の至宝』第二巻「絵巻物」一九八〇年、毎日新聞社)、『在外 奈良絵本』(フランクリン・C・セイヤー氏解題、奈良絵本国際研究会議編、一九八一年、角川書店) 等。なお上記の論考では塗籠本第七段の絵とされている。
- (8) 鉄心齋乙本は絵のみを貼り継いだ二巻の絵巻で、錯簡があるものの、第一巻には大英図書館本第一帖の絵のみ、第二巻には同じく第二帖の絵のみを収録している。『鉄心齋文庫所蔵伊勢物語図録 第十九集』に絵のすべてと解題(片桐弥生氏) 所収。注1の『伊勢物語絵巻絵本大成』に絵の一部と解題(山本登朗氏) 所収。
- (9) 本間美術館蔵伝民部卿局筆本の引用は、復刻日本古典文学館の複製(一九七六年、ほるぷ出版)、真名本の引用は高橋忠彦・高橋久子編『真名本伊勢物語 本文と索引』(二〇〇〇年、新典社) 所収の寛永二十年板本影印による。
- (10) 澤田氏は、白描本の男の服装には「冠に直衣(もしくは束帯)

姿」「烏帽子に狩衣姿」「風折烏帽子に狩衣姿」の三種があり「冠に直衣姿は改まった衣体をとるべきときの服装、烏帽子に狩衣姿は野外狩猟の服装および一般の私服、風折烏帽子は遠国や田舎に下るときにの服装として、明確に描き分けられている」(『伊勢物語絵巻絵本大成』研究篇二六頁)と指摘されている。

(11) 伊藤敏子氏は『伊勢物語絵』解題二六頁で「古本に基づく伊勢物語絵巻が伝承の過程において、本文が定家本に替ることにより、この章がないので、便宜的に定家本の二八段に当嵌められたのではないだろうか。ところが、二八段は物語的な展開もなく、情緒に欠けることもあって、いつしか脱落したのではないかと推測される」と述べられている。

(12) 注9の高橋忠彦・高橋久子編『真名本伊勢物語 本文と索引』、『真名本伊勢物語 綾足校訂』(一九九五年、翰林書房)に先行研究がまとめられている。

(13) 『伊勢物語絵巻絵本大成』研究篇八八〜八九頁、山本登朗氏小野家本解題。

本稿は平成十九年度科学研究費補助金(基盤研究(C))による研究成果の一部である。

(あおき しづこ・本学准教授)